

Glocal Tenri



6

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.18 No.6 June 2017

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

CONTENTS

- ・ 巻頭言
『『逸話篇』に学ぶ(3)』開講に寄せて
／高見宇造..... 1
- ・ 天理教教理史断章(117)
勢山文書⑧「おさしづ」の写し翻刻
／安井幹夫..... 2
- ・ 『教祖伝』探究(36)
かんろだいの石普請②
／深谷忠一..... 3
- ・ 「おふでさき」天理言語学試論～「こと」
の世界観への未来像～(38)
第5章 高橋和巳と『邪宗門』④
／井上昭夫..... 4
- ・ 「元初まりの話」に登場する動物たち(22)
「うなぎ」について①
／佐藤孝則..... 5
- ・ 日系移民の歴史にみる天理教の北米伝道
の様相(6)
戦前のアメリカ伝道と日系移民社会⑤
／尾上貴行..... 6
- ・ 「おふでさき」の標石的用法(22)
動詞について⑦
／深谷耕治..... 7
- ・ 伝道と翻訳 —受容と変容の“はざま”で—(5)
翻訳とは④
／成田道広..... 8
- ・ 地域福祉を拓く —新たな寄付文化の創造—
(30)
CSRと寄付③
／渡辺一城..... 9
- ・ ヴァチカン便り(26)
法王エジプト訪問ほか
／山口英雄..... 10
- ・ 図書紹介(99)
『ドイツ統一から探るヨーロッパのゆくえ』
／堀内みどり..... 11
- ・ 平成28年度公開教学講座要旨：現代の事情
に対する天理教の思案(7)
戦争—和睦なるよう
／佐藤浩司..... 12
- ・ English Summary..... 13
- ・ おやさと研究所ニュース..... 14
第8回伝道フォーラム／第302回研究
報告会(陳 宗炫)／華厳専宗国際学
術シンポジウムに参加(金子 昭)／『グ
ローカル天理』合本のご案内／おやさ
と研究所 出版物一覧／平成29年度公
開教学講座のご案内

巻頭言

『『逸話篇』に学ぶ(3)』開講に寄せて

おやさと研究所長 高見宇造 Uzo Takami

おやさと研究所では4月から公開教学講座「信仰に生きる『逸話篇』に学ぶ(3)」を開講しました。『稿本天理教教祖伝逸話篇』は、身近に存命の教祖の面影を求めて信仰実践の基本となるように意を尽くされていますから、講座では教祖の「逸話」を手がかりとして、信仰世界の一端を明らかにしたいと考えています。

私は第1回目で45話「心の皺を」を取り上げました。それは「皺だらけになった紙を、そのまま置けば、落とし紙か鼻紙にするより仕様ないで。これを丁寧に皺を伸ばして置いたなら、何んなりとも使われる。落とし紙や鼻紙になったら、もう一度引き上げることは出来ぬやろ。人のたすけもこの理やで。心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで。」というものです。

「人のたすけもこの理やで」とあるように、このお話にはおたすけの神髄が具体的に述べられています。「心の皺を、話の理で伸ばしてやるのやで」とは、「人間の反故を、作らんようにしておくれ。」(『逸話篇』112話)と対応していますから、これがおたすけの目指すものということが出来ます。言うまでもなく「反故」とは書き損じた不用の紙のことです。

では「話の理」とは何でしょうか。「おさしづ」には「兄弟なら兄弟のように、扶け合い、皆めんへの事に合わせば、皆めんへ—そうであったら—、人間は、かりもの分らんから。かりもの分かれば、扶け合いの心浮かむへ。この理論したら、救いの道理、この理一つである。」(M33・3・22補)とありますから「いちれつ兄弟」「かしもの・かりもの」「扶け合い」のお話になります。私はこれがお道のおたすけのイメージだと考えています。『逸話篇』を読むことで私たちの信仰がより豊かな、また具体的なものになることに気づきます。

ところで、私は他大学で看護学・社会福祉学専攻の学生に天理教の講義をする機会がありますが、そのなかで学生が特に共鳴するのが、実はこの逸話「心の皺を」です。受講学生の感想を紹介すると、

・「心の皺」を話の理で伸ばしてあげるためには、コミュニケーション能力がとも必要になると思います。天理教の教えは医療従事者として支援をしていくために必要と感じました。

・私の志す看護において考えたとき、病気や怪我で不安な患者さんの心は、天理教でいう「心の皺」だと理解しました。

・天理教の考え方は福祉や医療にも適用されるべき考えだと思います。もう駄目になりそうな人に寄り添って、丁寧に支援していく、諦めずに救うということでしょうか。

こうした感想から、この逸話は将来対人援助を志す学生の心に響くことが分かります。ではこの「逸話」の世界を現代社会でどのように理解、具体的に展開するのかを考えると、例えば教誨師や保護司の活動があります。

教誨師は「誰もが自由に出入り出来ない場所へ赴いて、親身になって被収容者の心の内なる悩みを聴き、心の皺を話の理で伸ばすことによって、その人の心に灯りをともすことであろうと思います。」(『天理教教誨の歩み』平成21年)と言われます。

また保護司は「『心の皺を』の教祖の親心に応えるべく、社会の片隅で、もがき苦しんでいる人のそばで話を聞き、心を通わせ、対象者が前向きに一步を踏み出せるよう、更正の手助けをしております。」(『福祉のひろば』平成29年4月号)と言われます。ご存知のように天理教の里親は『逸話篇』86話「大きなたすけ」の「人の子を預かって育ててやる程の大きなたすけはない。」を心の支えに取り組みでおられます。いずれも『逸話篇』を典拠とすることで自らの取り組みをおたすけへと昇華しておられるのです。

このように『逸話篇』は、同「はしがき」にあるように「全よふばくの魂に溶けこんで、たすけ一条の原動力」となるものです。研究所では「逸話」が秘めるおたすけの力にこれからも着目したいと思います。皆様の講座へのご来場を心よりお待ちしております。